

小學校用農業書

古澤角三郎編纂

三

圖書總合目錄			
三	二	一	三
六函	二架	七號	三册

276
3
668

K120,6
5
3

K120.6

5

3

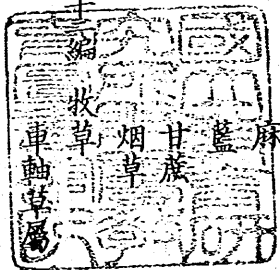
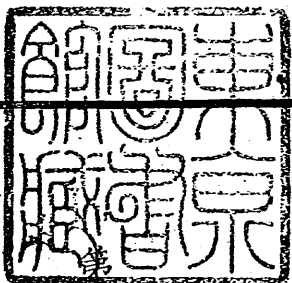
明治二十年六月一日内務省交付ノ

小樽農業書第三目次

第十一編 特有作物



茶
草綿



麻
藍
甘蔗
烟草
牧草
車軸草屬

苜蓿屬

紅豆草

ライグラス

芻草埋藏法

第十三編 牧畜

小樽農業書第三目次

目次

教育書博覽所並日校舎

牛 馬

牛耕馬耕ノ得失

羊

豚

第十四編 桑蠶

蚕

蠶

校用 農業書第三

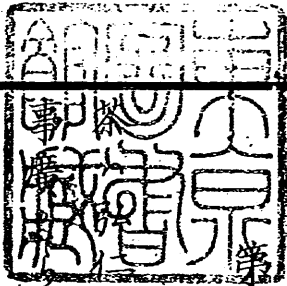
農學得業士 古澤角三郎 著

第十一編 特有作物

茶

の昔、己み本邦み舶載せりと雖、播種此
びく後漸絶えくくくと、建久二年僧
明慧宋より茶子を齎し來りくくく之を栽植し
るく大み興りく、當今ハ貿易品に主要なるも
のとあるは至きり、

茶樹を栽るるみく、氣候溫和みく霧深く、高地

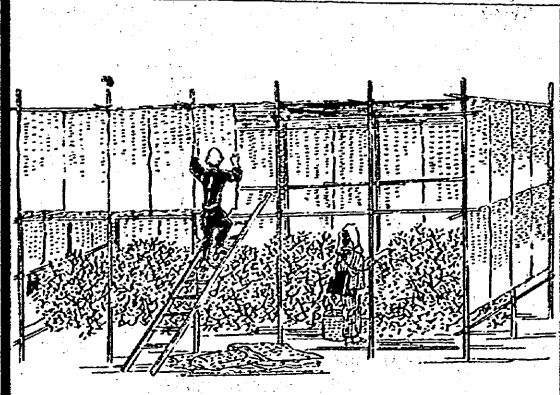


あつて砂礫を交へたる土壤と良きも、夏月の炎熱なる處に於て、植物質を多く含む地は殖ゑたるも此の發生盛なまども、香味惡くして甚苦味を呈し、然れども苦味強きもの、反て海外輸出の茶を製するに適せざるが如し、又山腹より他植物の耕作に適せざる地あり、生育せしむることを得べし、種子は十一月頃能く熟し、と收めて直に蒔付くるる、又、地中に埋置き、翌春取出して水撰法を行ひ、尚三四日間水に漬し置きて播くる、之を播き付くるに三法あり、即種

子二十五粒を一尺五寸許の直径の圓く播くを輪播と云ひ、長く一線に播くを畦播と云ひ、二寸許を離して碁盤の目此如く播くを株播と云ふ、畦は南北に立て、茶樹は日光を平等に受くる様にし、畦は距離を一丈許とし、初兩三年は、畦間に穀類を栽培し、夏期は、勉めて雑草を除き、冬期は、防寒をす、堆積肥料鳥糞等を施せば、三年目より摘葉に適し、但初年の茶質惡くども、年を経るに従ひて、漸良質となるものあり、其の後、年々四回施肥をく、即ち春は、摘葉の五

六日前、鳥糞此水に溶いたるもの、或も人糞尿の類を施し、夏の雑草を除きて根の傍に埋め、尚油滓、或は魚粕搾滓を施し、秋十月頃も亦之を給し、冬十二月頃人糞を寒肥として施すべし、

摘葉は、八十八夜、即五月二日頃、三葉程開けたる時と良とを、上等此品を製するもの、摘葉の十五日前より茶園を簀



あて被ひ、日光を遮断して暗黒なりしを、而して後摘葉を多し、

茶は紅茶、緑茶は別あり、又緑茶に煎茶、薄茶、濃茶等あり、

煎茶を製するもの、釜に水七八分を入りて沸騰せしめ、上は蒸餾を載せ、中は茶葉を薄く散布して、水蒸氣全葉に透りし頃、蒸餾を釜より取り下し、冷し、茶葉は焙茶箱に移し、焙せると同時に手ろを揉捻し、或は攪拌し、且火氣の初強く漸々弱くし、而して水氣を減し青黒色とな

り、指間より挾搾して折碎する様ふありたり、或取
出し、篩より篩ひ分くる形なり、



又紅茶を製するふは、生葉を四五寸此厚の席に
撒布し、六時間許太陽に曝し
て後葉を握り固め、指間より
稍汁を出づるまで手より揉
み、又之を握り固め、桶に入
れ、固く蓋をす、二十四時を
経て、茶葉紅色を帶ぶるは、桶
より取出し、塊を碎き、煎茶の

如く焙茶箱より乾し、篩より篩ひ分くへし、

草綿

草綿は、延暦の昔、崑崙人始りて三河に傳へり、
一時中絶し、天文十一年再葡萄牙人、豊後に傳
へたるより廣きなりと云ふ、

草綿は、砂交り土壤より能く日光を受け、空氣
は流通宜しく、且灌漑し便なる處を良とし、又沃
土若くは植物質を多く含める地は、莖が繁り
く、綿絮は質惡く、收穫も亦少し、

草綿は、高燥の田地より、稲と隔年し、畑地より

ハ、麥類此後ハ耕作も、浅通常とシ、
春陽降霜なきヨ至まバ、成るべく早く下種も、
一之ヲ下種するも、種子ハ水を少シ澆ぎ、灰を
和シ、攪拌シテ後水撰法と行
ハ、種量ハ、每反七八百目此割
合を以テ播く。

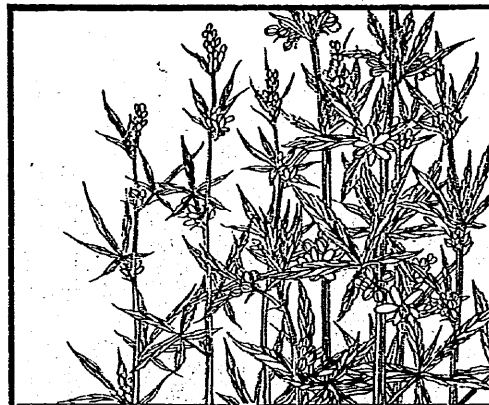
肥料ハ、堆積肥料、混和肥料、人
糞尿、油滓、木灰、魚肥等と早く
與ふべし、晚ク施レるときハ、繁
育從ヒテ遲滞シ、花を著くる



事少ク又綿絮と吐く事ハ宜しく、
草綿一尺四五寸長トシ、
枝と出さしむべし、草綿ハ、早天を好み、停滯水
を忌むと雖、又灌水を行ふハ最良なりとシ、
收穫ハ、花が開きたるとき行ヒ、後日ハ乾シテ貯
ふへし、

麻

麻ハ、雌雄其の株、或異ルモ、麻子と取るハ、雌本
を要シ、纖維を取るハ、雄本を可とし、麻を培植
するハ、有機物を含む土、砂壤を好ミ、風當強



うらざる土地を良し、之を植ふべき地へ、前年より能く耕し置き、三月下旬より及びて、五寸許の距離に畦を作りて、混和肥料或は堆積肥料を施し、水撰し、種子を播き、而して後之を薄く土を覆ひ、屢雑草を去り、一回耕耘を行ひて、大凡七月迄経る、稍葉の色變つたると、刈り取り、熱湯中に浸し、後日光をあて、乾し、之を清水に漬け、再日光をあて

乾し、更し熱湯に浸し、皮を剥ぎ、麻扱臺より外皮を去り、以て麻の纖維を製し、

藍

藍は、高燥を好み、肥沃の砂壤を良し、又屢洪水の爲し他の耕作に適せざる場所に適し、故に畿内邊より、殊更に灌水を行へり、

藍は、蒔付を多し、妨がりと雖、苗床は仕立て、後畑地に移植するを良し、苗床は日當能き沃地を撰びて、冬より堆積肥料等を鋤き込め、早春糞汁を注ぎて地を平め、三月上旬頃水撰を行ひ

たる種子、一歩一合を下種し、薄く土を覆ふべし、斯くもまば、一歩は苗の一段の畑地へ植うるに充分なり、

四月頃ふ至まば、三四本を

一株とし、苗の梢端を揃へて植ふ、後三四回耕耘を行ひ、雑草を去り、時々魚肥、油滓、人糞尿等を施肥し、七八月頃、蕾の將ふ生ぜんとき、一番藍を刈り取り、後又其の株より出てたる二番藍



を刈り取る、こゝろ久し種子を收むる、ふも、二番或は三番藍より取るべし、

降雨なき日を見定め、晡時或は早朝に刈り取り、畑地へ布き廣げ、日中へ屢反覆し、半乾きたる時、太莖を切り去り、又蓆へ廣げて十分之を乾し、



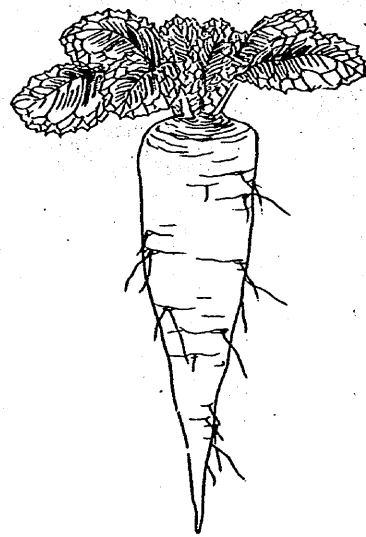
て俵装をべし、又上等の品を製し、ふも、生鮮は時葉を扱き取り、十分乾し、後俵装するなり、

苧藍より製したるものは、藍より製するものと得、即生の藍葉を桶に漬け、醗酵したるとき、液を他器に移して静に放置せば、自に澱分沈澱する。以て、上水を去りて、後之を煮るべし。

甘蔗

本邦中砂糖を産し得ざる地を、即北海道の、菜の栽培に適し、北陸及東山の二道より、蘆粟生育し、他乃暖國の、甘蔗に適し、然れども、茶菜の栽培製糖共に學理を要し、且本邦農家は未だ馴熟せざる者なり、甘蔗に至りては、栽培製糖の業共に

易く、本邦の農家既に熟練し、且蘆粟も亦製糖栽培の法、稍之に類せると以て、爰に甘蔗の栽培を擧ぐ、



甘蔗は、夏暑く、空氣乾燥し、霜降るると遅く、東南の方開け、西北の山を帯び、水利便なる處を良とす。又土質は、砂壤より有機物質少く、下層の過濕なりとす。を良とし、有機物質を多く含む地は、

莖太きとも糖分少く、且其の質劣まり、甘蔗を水田或は陸田に作る水田より稻比後畑地に於て麥類、藍草綿等の後、作を常とし、苗種の暖國に於ては、前年の株を用ふをとも、通常莖、土中より貯へ置き、翌年四月頃掘出し、梢の方半分だけ、苗に用ふべし、之を植ふる法種々あるをとも、通常二尺五、六寸の距離に畦を作り、毎畦四五寸許離れて、二芽を有する苗種を二本つゝ並べ植ゑ、出芽多きを抜き去り、一株十五本許をとも、一頃、魚洗搾搾十貫目を、二葉發生する頃、魚洗搾搾十貫目

を初肥とし、一月を経て十五貫目を二番とし、七月の初二十五貫目を止肥として用ふ、

凡て魚肥、油滓、骨粉の如き磷酸及窒素質を多く含めるをけし、良好なる肥料なきとも、窒素質多きと過るるとに及り、糖分を減少し、其の質を悪くするを、宜しく注意を要す、

甘蔗も、早に續き、土地乾くも、漸灌水し、水分を保持すを、糖分多く生じ、其の質佳なりとす、

莖、下部にある枯葉を、勉めて取り去り、風の

爲ふ倒きざり様株側より土を鋤き寄るべし、又其の刈取りの土地氣候より異なると、十一月頃、莖の下半部色に變つた時を佳とし、

烟草

本邦の烟草は質惡く佳香を乏しき事、需要少し、是畢竟栽培に宜きを得ざる事と多き故なるを、宜く栽培法と研究し之を改良しべし、

烟草は高燥ある地にて有機物質が富み砂壤を佳く陰濕なる地の惡し然れども降雨

は多き優良とし、

苗床は精密な作業を牛馬糞木灰堆積肥料等と施し、三月上旬頃、毎坪四才比割合は蒔付け、霜覆

をぬき、五月頃雨前を撰び、八寸許を離し移植をす



肥料は烟草栽培中最大切なり、剥篤亞斯は其の質を善良とし、窒素質の收穫を増せども、其の質を惡く

又食鹽、燃燒、難き粗質の者と生じ、故に烟草に適したる肥料、硝石、木灰、牛馬の糞等、人の糞、尿、魚肥、過磷酸、石灰、用ひざるを可とし、烟草は晴天葉の附きたる儘刈り取り、之に適宜此隔より杆を掛けて陰乾し、數日を経り取下し、三十匁位を束ねて床板の上へ積み置き、

第十二編 牧草

牧畜は國家に必要なるは、世人の能く知る所なきも、本邦は家畜の、つゆと善良あるものなり、故に之を改良するも、先良牧草を栽植せむ

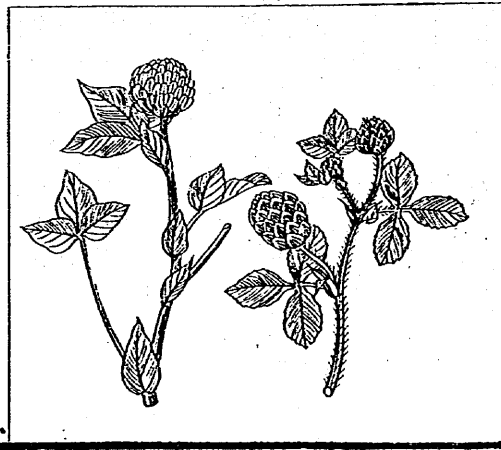
ありべかりき牧草惡きものなり、牧畜者假令其の管理法巧しき、且外國より善良なる種畜を輸入せざる、決して改良せざる能くざるなり、英國の諺に曰、良き種類は口より來ると、又以て其の一端を知るに足るべし、故に最要用なる牧草は種類を左に擧げん、

車軸草屬

之に屬する牧草は、「ムラサキツメクサ」「ベニバナツメクサ」「シロツメクサ」「シヤヂクサ」等といふ、車軸草屬は、豈科植物にして、石灰を含める土壤

2 能く生育し、
 車軸草屬を植へべき土地は、屢犁耙及輓軸を以
 て十分よ土壤を操作せしめ、車軸草屬を夏作此
 後よ播種せしめ、土壤を浅く耙攪し、或ハ輓
 軸浅以て鎮壓せしめ、又春分大麥、小麥「マカラス
 ムギ」等の畦間に播種せしめるときも、只耙攪せしめ
 みうて足きりせしめ、
 播く種乃量は、場合よ異なる、假令ハ
 砂土及禾穀の畦間に播くは、埴土及夏作後よ
 下種せしめるときも多きと要するが如しと雖、大

抵毎及三百目乃至四百五
 十目と、
 牧場みせんとする處に、
 車軸草屬と禾本科の牧草
 を混じり播種せしめ、
 肥料ハ、人畜糞尿草木の
 灰骨粉油搾滓等なり、車軸
 草屬ハ、一年或ハ二年間續生せしむるを常とし、
 刈取せし生鮮此儘與へ、或ハ乾燥して飼養し供
 之、之を刈取るハ、花地満開の時を最良とせ、之



より早きは質佳あまざる量少く、之より遅き
滋養の効力を減少す、

凡乾草一たび雨に遇ふ、或は速に乾燥せざる
とき、大に其の味を損ひ、加之荳科牧草の滋養
の効力を減じ、それなり、故に二三日間は降雨
なき日を見定めて、早朝に刈取るべし、

種子は繁茂甚しきものより採取す、は惡し、第
二番生のもれより收むるを可とし、又花頭の柔
軟なるは、種子を結ぶると少く、宜しく堅き
ものを撰ぶべし、

車軸草屬は、種々の徴に罹る、こゝろは、徴の生ト
たるもれ、畜類に害あり、飼料に用ふ可らば、

苜蓿屬

之は屬せる牧草は、ムラサキウマゴヤシ、コツグ
ウマゴヤシ、ウマゴヤシ等、

苜蓿屬は、前の牧草より亞ぎ、緊要なる牧草
て、土地氣候によりて、其の利益反りて車軸草
屬よりも優るゝとあり、

苜蓿屬は、氣候温暖よりて、空氣乾燥し、土質は深
き壤土よりて、石灰を含み、下層過濕なると、

要し、

苜蓿屬は、三年乃至十五年間、同圃に續生せしむるに常として、苜蓿屬を栽すべき地は、深耕を要し、播種の期は四月以後とす。種量は一反歩に七百目許とし、



種子は、美黄色にして光澤あり、それを良くし、白色ならぬ未熟なものは、褐色なり。乾燥の為に發

芽力を失ひ、その多し、

雑草の繁茂は、苜蓿屬の發生に有害なり。者あるを、之を抜き去る事に注意すべし、

肥料は、骨粉、草木灰、石灰と發芽前或は毎年秋期に施し、人畜の糞尿も良き肥料なり。腐熟十分ならざるものは害あり

又刈取播種等の注意は、車軸草屬と同じ、

紅豆草

前記述べたる二牧草は如く、生の儘家畜に與ふるに鼓脹と稱する病を起すに患なり、

紅豆草を栽うるハ、石灰ふ富みたる深き土壤より、下層の乾きたる地を要し、又土地高燥なるう或ハ稍瘠せざる地ふも能く成長せむることを得べし、之と下種するも、燕菁、此後ふ三四月頃大麥と雜栽せしむと常ども、其の

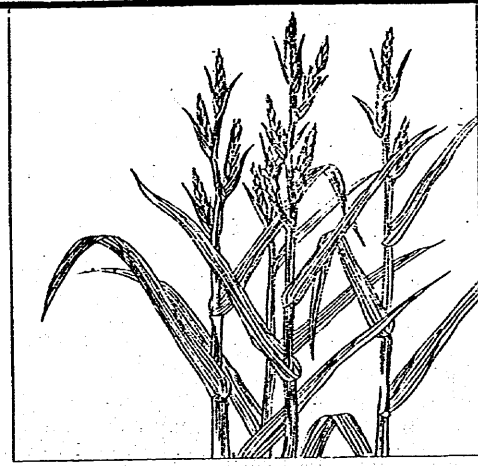


種量ハ、每反莢を被りたるも此四斗乃至六斗とす、

穀類を收穫すれば、紅豆草ハ速ニ發生すをども、放飼せざる可とも、數年連載するもの、初年ハ乾草と製し、次年より便宜によりて放飼を行ひ、五年目ハ之を犁込し、他の作物を植へべし、刈取播種等乃注意ハ車軸屬は同ト、

ライグラス

ライグラスハ、歐米諸國に於て最貴重なる禾本科の牧草として、何の土地にも能く繁茂し、種子



みの往々雑草の種子交り
易きまねなれば、宜しく精
撰をべし、種量ハ一反ハ二
百目より六百目と云、
播種の期節ハ、春時より方り
てハ、穀類乃畦間或ハ明地
ハ播くことあり、又夏ハ穀
類收穫の後直ハ播くことあり、
下種後ハ輓軸を
以て鎮壓し、
ライグラスハ、濕氣を好むと以て、水と灌ずる能

く繁茂して、年々十回も刈り取ることを得れば、
毎年一反に五百四五十貫の收穫を得るものとあ
り、

芻草埋藏法

冬期ハ青草なきを以て、常に牧畜者の苦む所な
り、故に近時歐洲ハ於てハ、芻草埋藏の法盛に行
はる、之を行ふハ、大五尺許の穴を掘りて、中ハ
玉蜀黍、青芻或ハ萊菔、蕪菁等の葉を生鮮、若くハ
少くハ乾く入を、足で踏固め、斯の如く累
々相積みて地平と殆同高と至るべし、上より土を

盛りて空氣は入らざる様、能く壓し置た、又雨水は浸入せざる様、屋根で設く厩、冬月青芻なきと雖、至り之を掘出して畜類は與ふべし、畜類は初好むども、狀あまざる、遂に之を好むに至るべし、又酸味甚しきもの、少量は白堊粉を和して與ふべし、

第十三編 牧畜

牛

牛も其の用あり、所の目的は從ひて種類を撰ぶ、例へば乳牛は和蘭陀種、肉牛は短角種、役牛

はサツセッキス種の如た最

其の用に適せり、

撰種法 蕃殖用ふ供も

るもの、必精撰せざる

あるを、何となき

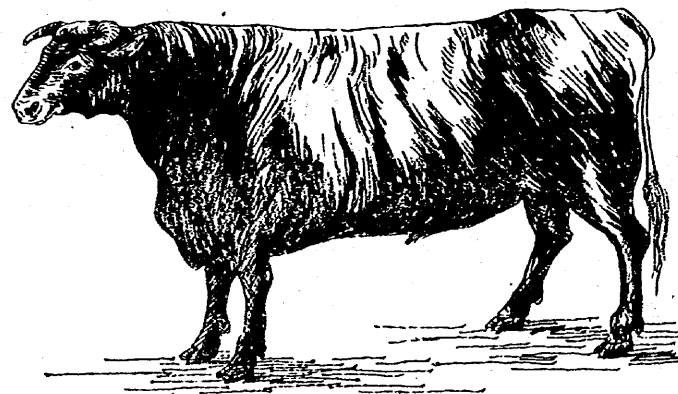
ば子に多く親の性質を

傳ふるものあり、親善

良強健なきを、其の子も

亦善良強健なり、之に反

して病牛就中肺病、眼病



等は罹りたるものの子は、亦肺病眼病等に罹る
こと多く、縱其の子は於て然らざるも、其の孫は
至りて復該病を發すことあり、故お人々此婚
姻をもよく能く系統を擇ぶが如く、彼の無病健全
みづから其の用は適せるものと撰びて蕃殖用は
供を盡し、又用ふる所は目的の異なるに従ひて、
選種する要點の差異を擧げれば、役牛は骨格太
く皮膚緊張、其の角粗剛、其の胸膈大く粗野
此狀を呈するものと良と云ふ、

肉牛は短角牛の如く骨格細く、胸膈細く、胸膈小

く皮毛共は柔軟ふく、肥腴早熟の性と有せる
者を良と云ふ、

乳牛は皮肌緻密く、頭部みづから張り、體部も
ては弛み、毛は軟く短きものと密生し、乳房
の靜脈も亦能く發育し、乳鏡も著しく良と云ふ、
乳鏡といふ、肛門の下部即會壓部の毛耑逆上せる
と云ふ、

飼養及保護法 生殖に用ふる牛は、滋味比食料
と供するものと、或要ひ、牝牛は殊ふ然りとす肥満
し過ぐる時の懷妊も、いと少く、又假令懷妊を

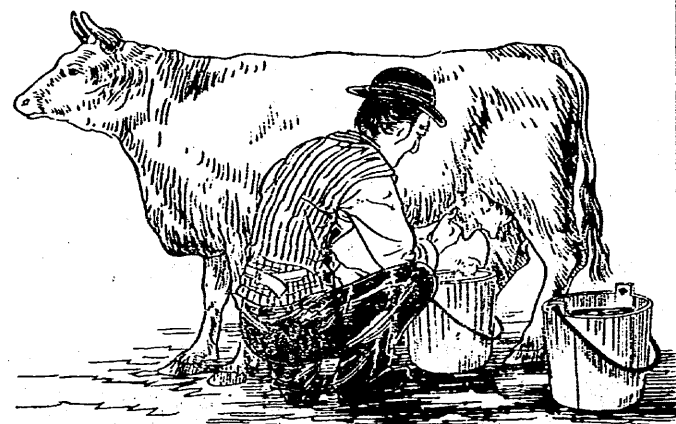
るも流産するもの多し、牛舎へ日々掃除し、糞尿の類を積み置くものなり、分娩は春日青草繁茂の時、於てその様は注意をべし、牝は二歳に至らざれば蕃殖用は用ふべからず、懐妊後九月より分娩すものなり、此の期に至るは其の用意をせよ。

犢産まれ、二三時間の後、母牛は乳房を揉み、け微温湯を以て洗ひ、犢を銜せしむべし、犢は乳汁を飲せしむるも、一日は三回を度とし、又乳房は腫れ痛む様子なれば、母牛の眼を掩ひ、稍生

長し、他は犢を牽き來り、徐に乳汁を飲せしむるも、犢生きて二三日の間は、母牛と共に牛舎内に居り、四五日を経て後温暖の日ふは、牧場へ牽き往き、母牛と共に放し置き、夜の牽き歸りて牛舎に入れ、十日より後、哺乳の外は、濫ふ母牛は近づけず、その様犢を繋ぎ置けしむ。又犢の吸ひ終り、後母牛の乳房を探りて、飲殘を乳汁を取去るべし。

斯の如く初の二三週間、生乳を用ひ、其の後一ヶ月は、生乳と搾乳即乳汁中より乳油を取去り

たる滓と混和して與へ、其の後一ヶ月、滓乳
 小「マカラスムギ」粉、大麥粉或ハ油滓の少量と
 混和して與へ、犢此生育す。一從むて、此の混和
 物の量を増ひ、此の飲料と犢飲す。一むる
 あり、牧者指を出せば、犢之と銜み、吸ふものな
 る、其の指を下して飲料と觸せしむべし、斯く
 すれば、犢能く吸飲するものなり。六時間毎
 之と行ひ、外一軟き乾草と食む習しむ。犢産
 て百日に及ぶ時、麩青草軟き乾草等と與へ、漸
 次粗食に習しむべし。乳牛の乳と搾る前、乳房



を微温湯みで洗ひ、温め、後
 搾り残さぬ様能く搾るべし。
 若怠りて、残す時、乳房
 痛と起し、乳汁腐る膿とな
 り、大害を惹き起さるこ
 ろ、又搾乳し、後微温湯
 を以て洗ひ清め、柔なる乾
 布を以て拭ひ置、乾、乳
 汁と入る器へ、ブリッキ製
 のル比を良とひ、

牛を肥腴せしめて、多量の良肉を得んと欲せば、暗くして暖なる舎に入を、徒動遊戯せしめ、専脂多き滋養物と與ふべし、體量七十五貫目をこバ、一日は油粕若くは搾滓五合、根菜二貫目、乾草一貫五百目、藁三升と三回に分ち與ふべし、本邦産の牛と雖、三四十日にして體量を増加せしめ、こ二割許に至るものあり、

牛は飼養せしむ適せるもの、車軸草屬、苜蓿屬、豌豆、玉蜀黍、大麥、マカラスムギ、馬鈴薯、蕪菁、菜菔、油滓乾草等、こく入食鹽を毎日少許づゝ與ふ

べし、馬鈴薯、蕪菁、菜菔は剉み又ハ煮たるものを、用ふべし、干鰯も牛は由りて嗜食せしむべし、なれば試み、油滓干鰯と飼料と用ふる時、肥料の條も述し如き益あるものなれば、須く利用せしむべし、又都合ふ由りて米、マカラスムギ、豌豆等、は藁、其の他甘蔗の搾滓等と與ふるも好し、飼料の量、寒暑及勞役の度、應じて増減せしむべし、則寒冷及勞役せしむるときは、食料を増し、温暖及勞役なき時、之を減じしむべし、

牛馬共し蹄は務めて清潔せしむべし、糞尿は濕り

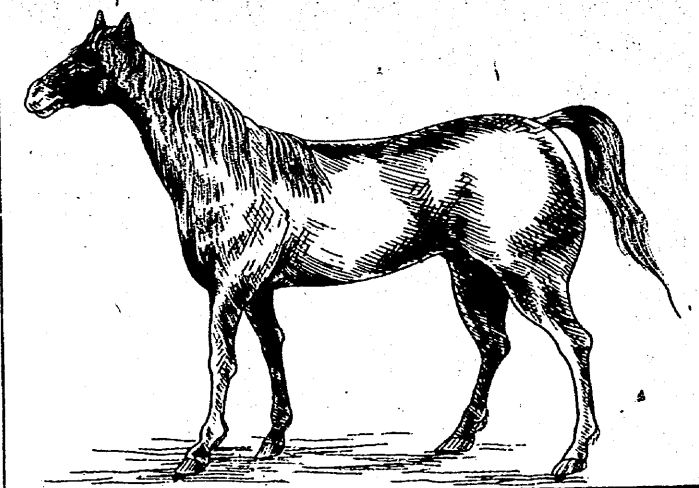
或ハ土塊等其の間に挟まざる為ニ病残起ルことあり、

雨後又ハ朝露の乾ッざる所ニ放牧を多クば、間鼓脹と稱する病ハ罹ルことあるべし、宜ク注意すべし、糞尿ハ變狀を呈シ、或ハ不安此狀あれむ直に獸醫を迎へて診察致さるべし、決して輕々ヨ看過をなすこと勿し、

馬

馬も亦種類を撰擇せざる可からず、亞刺比亞産ハ美麗ニシテ體格宜ク馬種ハ冠たる本

邦ニシテハ仙臺南部、鹿兒島産を良クシ、就中南部産ハ農用ニ適す、概シテ本邦産此馬ハ矮小ニシテ諸用就中軍用ニ適せず、宜ク早く改良シテ富國強兵の基と建てるべし、



整ひ健全——遺傳病なく、胸膈大——四肢
の下、部細く又牝牡著——大小の差なき者、或用
ふべし、尤牝の牡より少く小なりと良し
飼養及保護法 蕃殖用に供する馬は、牝牡共に
四五歳以上とし、受胎後十一ヶ月に——分娩す
るものなり、而して青草は有無より、三月より
七月までの間、分娩する様をすべし、懷妊中、
之、或重役に供し、或驚怖をむべからず、
仔馬産む後六ヶ月——母馬より分離し、
嘶聲の通ぜざる所に移し、マカラスムギ粉の煮

たる、或は刈——る胡蘿蔔、馬鈴薯と乾草と交ぜ
與へ、日中を廢し接したる、牧場は放ちて適宜に
運動をせしめ、夜は小舎に牽た絆を繋ぎ、牛馬
共に、牝の其の性強猛に——使役し便なり、故
に歐米諸國——一歳頃に至りて、畢丸を割去
るを常とし、小屋に夏涼——冬暖に——、空氣
の鬱積せざる様注意し、
仔馬三歳に至るまで、少く使役を初め、四歳
にて輕役し服せしめ、五歳より十歳まで、十分使
用し、と得る、若體格の調え、より早く之を

使用を怠り、往々病と惹起し、廢馬と形あることあり、

馬此飼料より、諸牧草就中車軸草屬、胡蘿蔔、蕪菁、萊菔の剉みたるもの、麦の敷、マカラスムギ粉、大麥粉、油滓粉等と良し、總て粉類の水を潤し、或は少許此鹽と共に生草を交へて與ふべし、

馬の性ハ體質弱く、動もすれば疾病を罹り易く、又驚怖し易し、一度驚怖せし場所へ、能く記憶して再其の所へ臨むを肯ぜざるものなり、又馬は勞役して未汗の乾くまで、直に鞍を取去る時

は、種々の病を引起くなり、宜しく注意しべし、

牛耕馬耕の得失

牛耕の便益なる要點と擧ぐまじ、之を購求するに費少く、又之を使役して後、販賣するも、僅か其の原價を減ずるに過ぎず、或は反りて價を増すことあり、然れども馬は年齢を重ねるに従ひて漸價を減少し、牛は病を罹ることも稀にして、粗飼料に耐へ、管理容易にして、働力強く、埴土地、開墾地、山間嶮峻なる地方に最も適し、只牛は不便とする所へ、進行遅慢なるあり、或は牛糞は馬糞より劣

羊は三月頃分娩せしむるを良とし、受胎後二十週間にわたり分娩するものなり、妊羊は冬の間能く保護飼養し、若妊羊群中に墮胎せしものあり、速に隔離せしむ。

羊は他の仔は哺乳せしむる好むものなり、他は他の仔羊に哺乳せしむるを欲せず、繼仔は其の實仔に血を塗り、若くは皮を摩擦せしむ、牡兒産後三週間を過ぎれば、温和なる日を撰びて割勢法を行ふ、尚三週間を経く、牝牝共に尾根を斷つ、羊は限らば畜類に都て仔は發育

を全うし、あんと欲せば、母畜を能く飼養せしむる、羊は青草出芽せば、温和なる日に、母仔共に牧場を放つべし、然るに、仔羊は自然草食の慣を易く、又、傍穀粉油滓と與ふ、羊は甚寒氣を畏るものあり、故、羊舎の位置は東南に向ひて、常に適度の日温を受く、暴風雨に遇ふと、早く、早く、舍窓を閉づべし、

剪毛は氣候に従ひ、遅速あり、雖、本邦より六月は初温暖ある日、以て行ふべし、剪毛の四五日前、羊を洗濯、石鹼、曹達等にて洗ひ、毛及

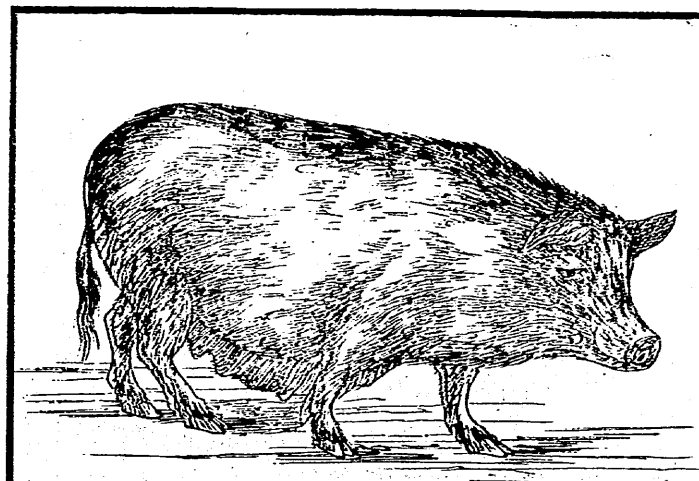
皮膚は印染せし汚穢物
を洗ひ去り置くべし、羊
舎の敷藁は殊に注意し
て屢入を易ふべし、然ら
ざるば羊蹄病を發す。
えのなり、
羊を飼養するに最畏る
べきは疥癬なり、一頭此
の病に罹るが數日な
どして一群に傳染して、



貴重此體毛と廢物と形をむ故に體と物品と
摩附くることあるを速に検査して烟草水
洗ひ、尚癒えざるもの、速に獸醫に指揮を乞ふ
べし、

豚

豚は野猪の變種せしものにして、氣候の寒暖と
嫌ふ能く生育し、蕃殖も至りて速なり、又飼料
は蔬菜穀肉の別なく新鮮と腐敗とを問はず、如
何なるものと雖食せざることをなし、沖繩縣
に人園の下に、米園の下に牛馬舎の下に豚舎と



設けて、人畜の糞尿等を食せしむる所あり、又牛乳の乳油、或ハ乾酪と取去りあるものも能く嗜食するものなむハ、縦牧農ニあゝざるハ、農家必數頭を飼ひて、須く廢棄物と利用を爲し、撰種法 牝牡とも無病ニ遺傳病なく、早

熟肥腴の性と有、骨骼細く、四肢適宜ニ短く、頭小く、皮肌軟滑、毛柔軟なるを良とし、飼養及保護法 豚ハ一歳以後ハ、繁殖用ニ供せしむることを得べし、五六月ニ至きハ、睾丸を割去し、肥腴せしめて屠る、懷妊ハ四ヶ月ニて、一年ニ二回、二年ニ五回の分娩あり、一産五頭より十頭を分娩するを以て、牝の乳房ハ十個乃至十二個とし、豚に与へて已の子を食する癖あり、ハ宜ニ注意すべし、前ニ述べたる如き豚ハ飼料ニ供すべきものなり、

牧場牛馬舎の遺棄物、庖厨、農場の廢棄物等と以て飼料することを得ると雖、之と肥腴せしめんと欲せば、蕪菁、馬鈴薯、胡蘿蔔、萊菔、大麥、蜀黍、玉蜀黍、豌豆、蠶豆等と煮て食せしむべし、

第十四編 桑蠶

桑

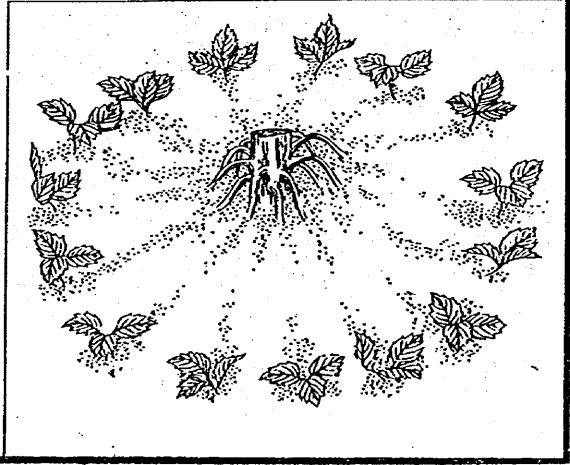
桑は、通常水邊の深き軟砂土に最適と雖、また何の地にも適する種類あり、宜しく撰びて植うべし、然れども苗地は、常に乾燥なる砂壤と良し、桑苗を仕立つるふも、株分、簾伏、挿木、撞木

取等あり、

實播の惡種も變じると多きも、只接砧を作るに用ふるべきなり、

株分、數法あり、傘取の春日本幹を土際より切去り、切口より十五六本の枝を生ぜしめ、枝一尺五寸許を

延びたるとき、直徑一尺七寸許の竹の環を藁にて包み、日中之を株の上より挿し付け、枝を四方より



伏せし土を覆ひ、且枝環の外より出でたる部を直
立せしむ。後此の曲り目より肥料を施し、漸く
とも時、此の部は多く根が生じ、後親木より切
離さる枯凋するごとく、之を切離し、踏
と用ふべし。

撞木取の株より發出したる四枝を畦の向より二
本づつ彎曲し、枝より芽凡五寸許延びたる頃土
を枝上より覆ひ、堆積肥料等を施し、後八寸許延び
たるを、再土を覆ひ置くとき、本枝より根を
生ずるを以て、傘取の如く切離し、本の四本の残

し置おく次

の年此親木

を用ふべし

簾伏の四月

上旬頃、廣四

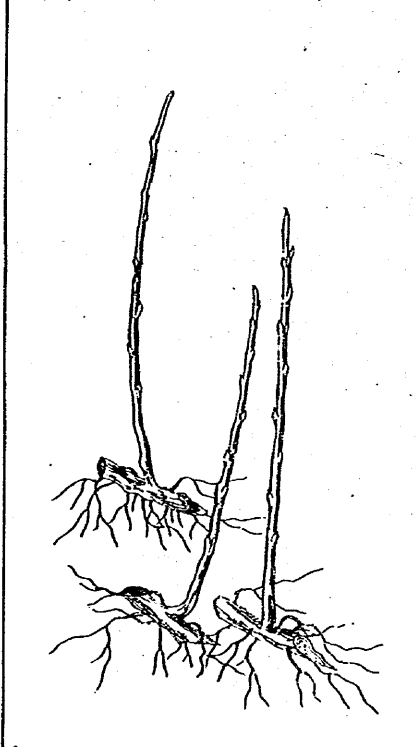
寸許の溝を

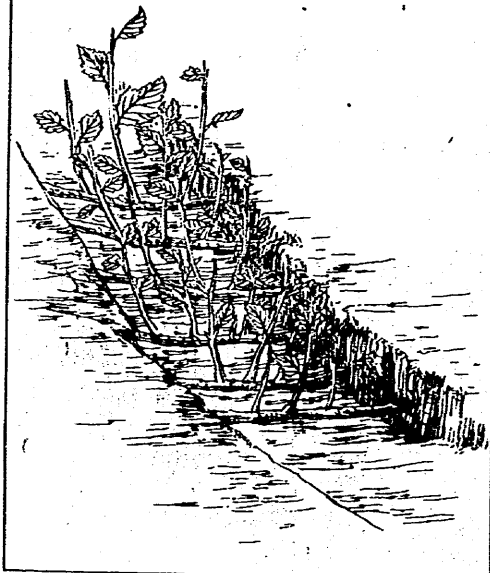
掘き、長一尺五六寸づつ

と横し伏せ、溝の両側より五六寸許に挿入し、中

央此部は土を覆ひ、唯日光を遮断する爲に藁

を置き、二十日より芽四寸許延びたる時、只





一、芽此數に應どく切離し、挿木ハ樹播法を良きとすなり、夏日土用より苗を青草及土を以て覆ひ、僅ふ其の梢端

二三本と残り、餘ハ摘み去り、堆積肥料落葉等、左右より覆ひ、後土を覆ひ置く時、根を生ずると以て之と掘り出

を残し、十一月頃樹皮黄色に變ると以て、之を親木より切離し、後四寸許に細斷し、冬間ハ淺く地中に埋み置き、翌春掘出し、七寸許の距離に穴を穿ちて之を入を、土を覆ふべし、

桑苗と移植する、其の葉は落ち始むるときを良し、又之を市場に出る、或ハ遠方ハ運搬する、ハ、假植するを要す、然れども直に本植となるもの、之を要せし、而して假植ハ直にすべし、

桑苗を本圃に植ふる距離ハ、刈桑自然等により

て異なるとも、自然桑の宅地山間等々、も適ひ、故に其隔りの適宜なすべし、

刈桑の畦の距離六七尺許より、毎畦三尺計を隔て直径一尺五寸深二尺の穴を掘り、其の底を軟く堆積肥料を入る、之より一尺五寸より切りたる苗を植ゑる日光を受けしむるを、翌春芽を簇生し六月頃に至りて一尺二寸許に延びるとき、堆積肥料魚肥等と土壤と交へる之を穴に充せば、後此の部分より多く鬚根を生じ、之より養料を取り、下端の根は深く固定し、風の爲

ふ吹き倒さるゝと少く且成長も甚速なり、肥料に人糞を寒肥として用ふべし、

又高刈桑、自然桑等古木となすを、葉少くして實と結ぶこと多きを、高接を行ふべし、之を行ふに、發芽の十日前枝なき所より切離し、通常接木の如く、甘皮の處より利刀にて剥ぎ、豫め能く削り置きたる種穂を之に挿入れ、繩にて巻き、砧木の切口に土を盛り、蓆で絡ひ置け、又砧木より生じたる芽を悉く摘去るべし、

蠶

養蠶は供用する家屋ハ朝夕の日光を受けざる
為メ南向より二階造り、能く空氣が流通せ
しむる爲に、四方は玻璃窓を設け、炎熱の時ハ開
き、冷涼あるときハ之を閉ぢ、火力若くハ蒸氣力
を用ひて室内を暖め、常メ華氏七八十度の溫度
を保たせむ。

蠶種ハ粒は大小あり、綠色より黄色を帯びた
るを良とし、紫色に光澤を帯びたる者ハ多
くの微粒子病を含むと云ふ、然るども微粒子病
の有無を確知するもの、顯微鏡の力を藉らずハ

あるべからず、又手を觸ると粒は落るが如きま
のハ宜しうす。

種紙は室内の溫度適當より、空氣が流通好き
所ハ貯へ置くべし、又或ハ寒水に浸りしものを
ども益ありと云ふ。

五月上旬頃ハ至りて、桑の芽出づるを、暖ある所
ハ種紙を出し置くべし、然る時ハ種粒青色を帶
びしを以て、此の時種紙を廣き紙より包み置き、
種子一枚ハ蠶兒五六十頭も卵殻を出せば、午前
十時頃より蠶籠は筵を敷き、其の上に種紙を載

せ又其乃種紙の上の方一分許ふ刈みたる桑葉を撒布し、蠶桑を充分に食せし頃、羽簾より種紙の裡に附きし蠶を



掃ひ落し、其の出残を種紙を復紙にて包み置き、翌日も亦前如く掃下しべし、桑の蠶の大程

に到むべしと云ふ諺あるをば、常に其に注意なくともあるを知らず、又一日に五六度桑を與ふべし、蠶卵化しき三四日を経るべし、前の蠶残一倍の廣げて養ふべし、蠶初眠中より桑の芽はく養ふ所をさぐり、葉を養ふを良しとて、又蠶糞を取去るに最緊要なり、三眠中より隔日し、其に後の毎日必去るべし、若之を怠るときは、蠶の健康を損し、種々此病害を惹起し、あり。

蠶は初より眠ふ就くと獅子休又初眠と云ひ、再眠を鷹休又二眠と云ひ、三眠と云ひ、船休又三眠と

云ふ、蠶の初眠より漸々廣く養ひ、三眠に至れば尺坪は蠶數九十許にすべし、四眠を庭休又四眠と云ふ、

四眠覺て七八日を經れば桑を食せど、籠の縁より匍出、絲を引きて繭を作り始むれば、拾ひ取りて簇に入るべし、既に繭を作りて蠶蛹に化せども、製絲家の太陽は晒し或は蒸氣若くは火力より蛹を殺しを常とす、

蠶種紙を製するに、繭此上は紙を掛け置とす、然る時の毎朝八時頃より蛾の繭を脱出

し、紙上は匍ひ上り、雌雄交尾し、之を其の儘別の紙に移し、午後二時頃之を引き離し、雌雄を種紙に載せし産卵せしむ、之を一番種と云ふ、又明朝之を別紙に移し、前如く産卵せしむ、之を二番種と云ふ、然まづも二番種の微粒子病を含むこと多く、又種紙は要する蠶の數に能く養ひたる蠶の繭より出たるもの、一枚は百頭より百二十頭とす、

蠶に最患ある病は微粒子病又黒痣病なり、之を防ぐに種紙の製法を改良するあり、即第一

同時に卵より出でる産仔を撰びて、後れて出でたるものの取り捨つる、

第二、眠起きの遅きものの取り捨つる、

第三、病蠶と認むべきものの取り捨つる、

第四、後より繭を作るものを取り捨つる、

第五、繭の質厚きもの、みだ蛾は羽化せむべし、

第六、蠶蛾の舉動活潑にして、少くも病なく、其の體は褐色斑なきものを撰ぶ、

第七、二番種に用ふるべく用ふるべし、

又蠶蛆の害を防ぐは、左の方法あるべし、

第一、桑の葉は裡面を撿して、蛆の卵なき者のみと與ふべし、

第二、空氣流通し、且日常能き所の桑の、我用ふべし、

第三、「ウミコ」タレコ「フシダカ」ダイの類は焼き捨つる、

第四、五六月の頃より、蠶蛆の蠅桑園に徘徊するものあるば、見當るに従ひて捕殺すべし、

第五、繭中此蛹を殺し、火力若くは蒸氣を用

校用農業書 第三 主

ふぶ

K120.6
9

小學校用 農業書第三終

明治二十年五月六日版權免許
同年五月出版

定價金拾錢

編纂者

愛知縣平民

古澤角三郎

愛知縣尾張國中島郡崎村三丁十六番地

熊本縣士族

辻敬之

東京下谷區練堀町十四番地

普及會

東京下谷區練堀町十四番地



出版人

發兌

